



TITLE:

[書評]もうひとつの伝記: ジョルジュ・リュバン編『ジョルジュ・サンド書簡集』

AUTHOR(S):

平井, 知香子

CITATION:

平井, 知香子. [書評]もうひとつの伝記: ジョルジュ・リュバン編『ジョルジュ・サンド書簡集』. 仏文研究 1994, 25: 233-237

ISSUE DATE:

1994-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/137811>

RIGHT:

もうひとつの伝記

ジョルジュ・リュバン編『ジョルジュ・サンド書簡集』

平 井 知香子

Mme S.—Ecrivons-lui d'ici, c'est poétique, romantique et historique¹⁾.

ジョルジュ・リュバン編『ジョルジュ・サンド書簡集・補遺²⁾』が1991年、25巻にわたったシリーズの最終巻として出版された。このシリーズは1964年の第1巻から数えて実に27年、実質的には編者のいう「半世紀に近い」歳月をかけた労作である。その功績をたたえ、翌1992年12月11日、パリ大学において記念論文集『ジョルジュ・サンドをめぐる³⁾』がリュバン氏に献呈された。この論集の序文でラムネー、ミシュレの書簡編集で知られるル・ギュー教授はリュバンの果たした「rôle novateur」について「彼のみが climat sandien を覆した」といい、民間のリュバンがいわば退官記念論文集に匹敵する「Homage」を受けた意義を強調している⁴⁾。また一方パリ第7大学教授ニコル・モゼも同年刊行の *Revue des Sciences Humaines* のサンド特集で、「サンドはあまりにも長く煉獄 purgatoire に置かれたが、その創造的産物（書簡）にたいして新たな追放を行うべきでない」と述べ、サンド研究の再考を勧めている⁵⁾。ではこの『書簡集』によって何が変わったのか？ リュバンは何を覆したのか？ その努力の跡をたどってみよう。

◇レリヤとコンスエロ

かつてアランは「『コンスエロ』あるゆえにジョルジュ・サンドが死ぬ日はこない⁶⁾」と言った。また1954年、アンドレ・モロワの画期的な伝記『ジョルジュ・サンド』*Lélia ou la vie de George Sand* が出版され、この本の終わりで著者は「コンスエロがレリヤに打ち勝った」と宣言した⁷⁾。レリヤとは「âme」と「corps」の分裂に悩むベシスティックなヒロインであり、コンスエロとは愛の永遠性を信じる理想的女性である。モロワはアランを受けて「あまりにも少ししか読まれない女性」を擁護し、コンスエロの勝利を結論としてはいるが、レリヤをサンドのロマン主義の最も重要な特徴とみなしている。当時知られる限りの資料を駆使したこの伝記はブームを呼び、長くサンド研究の基本的資料の役目を果たしてきた。だが、事実上作家サンドの一般的評価は芳しいものではなかった。題名レリヤのせいでいつも冷感性「frigidité」の女のイメージがつきまとい離れなかったし、さらにボードレールが *Mon cœur mis à nu* で投げつけた呪詛「cette latrine⁸⁾」からも長い間逃れることができないでいた。この言葉は女性の存在そのものに対する嫌悪、サンドだけでなく女性一般に対する社会の偏見に通じるものであっただろう。このような「サンド的風土」は、一部の心あるサンド学者の嘆くところでもあった⁹⁾。しかしサンドの不遇は長く続き、*Mon cœur mis à nu* が世に知られた翌年の1910年頃からリュバン版『書簡集』の成果が実り始める1970年頃までの間正当な評価は期待できなかった¹⁰⁾。

◇ジョルジュ・リュバン

ジョルジュ・リュバンはサンド友の会を舞台としてサンド研究に貢献し多くのサンディヤンの育成にも携わる一方、夫人とともに書簡の探索とその編集に力を注ぐこととなった。編集の実際については、

刊行半ば（第8巻刊行時）の記事 *Pourquoi et Comment publie-t-on une Correspondance*¹¹⁾と全巻完結後のインタビュー¹²⁾で直接語られている。それによるとまず特別な動機があった。サンドの故郷ノアンから25キロ離れた地に生まれたリュバンはサンドと同じ田舎、同じ農民を共有した。サンドの「田園小説」を彩る古い美しい言葉は祖父や祖母が使っていたものであり、自身何よりも親しいものであった。「共通の言語が共犯を創りだしたのだ¹³⁾」。小学生のころからサンドの作品を読み、まだ存命中の孫オーロール・サンド夫人と新たな書簡集の計画についても話したことがある。また特に1848年におけるサンドの政治思想に興味を持っていたという。こうした理由により極めて早い時期からサンドの世界に親しむことのできた氏が、最初伝記を書きたいと思ったのはごく自然であった。ところがアンドレ・モロワに先を越されてしまう。リュバン自身「Excellent biographe!」と認めざるを得なかったモロワの出現により、新たな伝記を書くことはできなくなった。彼の関心はこうして書簡編纂へと向かう。当時カルマン・レヴィ版6巻の書簡集が流布していたが、日付の不備や絶対数の不足などの理由から充分納得のいくものではなかった。幸運だったのは丁度そのころまとまった未発表の書簡の束がパリ市歴史図書館¹⁴⁾に入ったことだった。

◇実証的編纂

前記のパリ市歴史図書館をはじめとして、スペルベルク・ド・ロヴァンジュール文庫（シャンティイ）、国立図書館、古文書館、個人のコレクションなど、刊本をふくむ書簡探索の手が広がるにつれ多くの困難な作業がそれに伴った。

まず各々の手紙に最低三点の目録を作らなければならない。1. 存在場所（公的機関か個人か）2. 日付 3. 宛て名。まだコンピューターはなかったので整理は専らカードに頼った。最も重要なことは「*fichier-calendrier*」の作成で、サンドの居場所に応じて色分けされ、一日きざみで分類されたカードが用いられた。〈Y〉という文字が表わすのは主な出来事（健康、訪問客、会見者、観劇、読書、手紙など）。その他列挙するにとどめたものは、サンドの蔵書、劇作品、肖像類、寄贈書、サンドとその作品に関する記事、地理など。

すべての書簡をクロノロジックに配列するために特に「日付の決定」が大きな問題であった。サンドは必ずしも日付をつけていたわけではなく、書いた場所、言及された作品のデーター、劇作品の上演などが決定の手掛かりになることもあった。それでも分からない場合は用紙の特質、サインや筆跡の変化、インクの色、宛て先、消印、切手などの鑑定を行う。

例えば「書簡集」第1巻N°1の母あての手紙はそれまで1814年のものと推定されていたが、封筒の状態や自伝の記述から1812年と断定。またサンドがガルジレスで偶然日食を観察した時期を検討の結果、カルマン・レヴィ版「書簡集」では1857年に分類されていた7月19日付の手紙は、実は1860年のものであることが判明した（第16巻）。さらに1863年からは、サンド自身、名宛人の記録を残す習慣がついたこともあって、そのCarnetsが新たな資料として活用された。その結果、未だその所在は未確認ながら、ベルクソン宛に手紙を書いた事実なども明らかになったという（第17巻）。

◇「書簡集」の構成

具体的に構成を見てみよう。まず各巻の特色を表明した序文、つぎにクロノロジー、書誌、肖像類、その他さらに数字とアルファベットで示された万年暦。限られたページ数の中にできるだけ多くの情報を収めるための工夫としては、同じガルニエ古典叢書の「バルザック書簡集」全5巻（1960-1969）を編纂した友人のロジェ・ピエロの方針を採用し、脚注のほかに多少とも全体にわたる項目は巻末に一括して別にもうけた。名宛人とその紹介、パリの住居などの一覧がそれである。また作品名、地名、人名に加えて、愛、動物、金銭、子供の教育、読書、音楽、作品、政治、宗教、健康、旅などのサンドに固有のテーマの索引（アルファベット順）もあり、特に重要なページ数は太字にしている。

◇サンド書簡の特徴

ところで読者がある作家の書簡に期待するものはしばしばもうひとつの文学作品であり、そこに作家の内的な「真実」を見ようとする。また創作の秘密を探る資料として扱う場合もある。ではジョルジュ・サンドの場合「épistolière」としての特徴は何だろうか？ 彼女は手紙を書きながら小説のテーマを組み立てるといって「稀な能力」に恵まれ、しばしば用件を離れてレシ「crécit」に赴く。リュバンによれば多くの手紙はいわゆる「告白の手紙」「lettre-confession」であり、芸術作品「de véritables œuvres d'art」でさえである。例えば夫カジミールに、ピレネーで出会い五年間文通した恋人オーレリヤンへの思いを告白する手紙はリュバン版で22ページに及ぶ（第1巻、N°104）。またサンドと諍いの後、娘夫婦がノアンを去った折に書かれた周知の手紙は71ページを越え、ほとんど「nouvelle」である（第8巻、N°3699）。

サンドが手紙を書く習慣をごく自然に身につけたのは少女時代からの愛読書であったルソーの書簡体小説『新エロイズ』、スタール夫人の『ミルザあるいはある旅行者の手紙』*Mirza ou Lettres d'un Voyageur* などの影響からであろう。『書簡集補遺』には修道院時代の友人バズイン三姉妹にあてた85通の書簡がはじめて収録され、早くもこのころから作家としての才能を示し、文体を確立し始めたことが分かる。子供時代に報われなかった愛を他所に求めることを知った時期である。文通は愛に飢えた心を癒し、書きたい欲求を満たしてくれた。書いているうちに相手を忘れ、書くことに夢中になることもあった。自然美の描写、三姉妹の長女で夭逝したシェリや祖母の死の悲しみ、夫カジミールへの愛憎、ピレネーの恋、そしてそれがもとで姉妹との友情にひびが入り陰悪な状態が続いたこと、サンドの嘘の混じった詫言など、新たな事実が続出する。リュバンの綿密な注のおかげで他の巻や小説作品などとの関連がたどれるのも特筆に値する。このバズイン姉妹に加え、プラトニック・ラブに終わったオーレリアン・ド・セーズとの長年の文通は、サンドの書簡人生を決定的なものにした。遠く離れた友や恋人にあてた手紙が作家としてのサンドを育てたのである。彼女が一生を通じて書いた手紙は四万通から五万通にのぼる。リュバンによれば「サンドは心情を吐露するのが好きである。それはおしゃべりではなく、自己表現したいという意思である¹⁵⁾」。この言葉はまさしくボードレールから受けた非難「elle est bavarde」を意識し、それを否定したものにはかならない。『書簡集』とは自伝的自我「moi biographique」と関係の深いもうひとつの自我「autre moi」の表現であり、それを探ることによって作家を知り創作の秘密をも読み解くことができる。その扉を明ける鍵は一つではなく、多数ある。秘密の引き出しを明ける合鍵「passes」の束、それが『書簡集』なのである（第23巻序文）。

◇「宛名索引」

このシリーズには、本巻完結後の1991年に名宛人のみの索引 *George Sand, Index des correspondants* が1991年に刊行されている。これによると収録人名は二千人を越え、最も身近な家族をはじめ、文学者、芸術家、俳優、政治家、学者、外国人、庶民や貧しい人々、亡命者など、あたかも十九世紀全体を覆い尽くす観がある。また時期的には、例えば、フローベールは第17巻から第24巻までの8巻に、デュマ・フィスは第14巻、サント＝ブーヴは第17巻に多く登場している。名前だけの索引では簡単に過ぎるという印象はぬぐえないが、序文でもふれているように、すべての項目を網羅した索引の作成は個人の力を越えたもので、後進の当然引き継ぐべき仕事であろう。

◇「サンド的風土」を越えて

サンドとリュバンに共通の prénom「ジョルジュ」とはそもそもベリー人を意味し、また土地にまつわる伝説の悪魔ジョルジョンにも通じる。このような縁（«Georges et George, inséparables»¹⁶⁾）に結ばれたジョルジュ・リュバンによって、サンドはようやくミュッセやショパンの恋人の域を脱することが

できた。ボードレールが知ることのできなかった豊かで複雑なその全体像がここに姿を現わしたのである。近年、サンドの伝記が相次いで書かれるようになったのも、この『書簡集』を抜きにしては考えられない。「サンドはレリヤではない¹⁷⁾」という声も、公然と聞かれるようになった。また作品の方も、リュバンの業績を受けて新版が次々と出版されるようになった。ジュール・サンドーとの共著とみなされ、これまで重要視されなかった最初の小説『ローズとブランシュ¹⁸⁾』もリュバン自身の注目によって甦ることになった¹⁹⁾。今やかつての「サンド的風土」は、25巻に及ぶ全『書簡集』の存在そのものによって完全に克服された。同時にまた、編者リュバンはこの長年の努力の結晶を通じて、自らもうひとつの最も詳細で実証的な伝記を書き上げたということができよう。

* * *

黄色いクラシック・ガルニエ版の表紙は、各巻の特徴を表わした肖像画や写真で飾られている。第1巻は自画像、第2巻はメダル、第3巻は画家による肖像画、第8巻のようなカリカチュア的像もあり、晩年のものにはナダールの写真が登場する。そして『書簡集補遺』の表紙を飾るのは例のリュクサンブール公園にあるジョルジュ・サンド像である。サンドのパリでの最後の住居が近くにあったことも関連しているのであろう。編者リュバンはこの最終巻の序文でこれまでの仕事を振り返って「これまで喜びと同時に〈後悔〉の念に付きまとわれたままであった」と述べ、やっと〈牢獄〉から解放されることを喜びつつ読者に別れを告げている²⁰⁾。

その後の1993年夏、ブローニュの住居を訪れた筆者に対し、氏は「サンドの研究には人生〈vie〉が二ついる」と語った。しかし、補遺をふくめたいずれの巻にも収録をみあわせた7、8通の書簡が今もその手元にあり、近く年代を決定した上で公開すると言う。またテキストの校訂がなおざりにされ長く忘れ去られていた『ローズとブランシュ』についても引き続き関心を寄せている。〈Grand-père français²¹⁾〉と呼ばれている氏の近況を伝えて結びとしたい。

註

- 1) Georges Lubin (éd.), *Correspondance de George Sand. Supplément* (1817-1876), tome XXV, "Classiques Garniers", 1991 (以下 *Corr.* と略す), p. 912. 旅先のイタリヤからウジュヌ・ランベールにあてた手紙。この中でサンドは劇の場面を組み立てている。
- 2) *Ibid.*
- 3) *Mélanges offerts à Georges Lubin. Autour de George Sand*, dédiés par le Centre d'étude des correspondances des XIX^e et XX^e siècles, Faculté des Lettres et Sciences, Université de Brest, 1992. 第一部はサンド関係、第二部はラムネー、バルザック、ゾラなどおもに19世紀の書簡に関する論文の計17篇を収録。
- 4) *Les Amis de George Sand*, Nouvelle Série (以下 A.G.S. と略す), N°14, 1993, pp. 43-44.
- 5) *Revue des Sciences Humaines, George Sand*, Université Charles-de-Gaulle Lille III, N°226, 1992, p. 209, (以下, R.S.H. と略す)。
- 6) 杉本秀太郎訳『アラン文学論集』白水社, 1964, p. 253.
- 7) André Maurois, *Lélia ou la vie de George Sand*, Hachette, 1952 (河盛好蔵・島田昌治訳『ジョルジュ・サンド』新潮社, 1954, p. 531). Cf. 長塚隆二『ジョルジュ・サンド評伝』(読売新聞社, 1977) pp. 141-147; 拙稿「秘儀的ファンタスティック, ジョルジュ・サンドの作品における幻想的要素」(『京都大学文学部フランス文学研究室報告』昭和49年度, 1974)。
- 8) ボードレールは1855年8月14日、作者サンドに宛てて恋人マリー・ドープランの劇出演を依頼する手紙を書

- くが、結局実現せず、以来サンドに «une haine folie» を抱くようになったという。(Léon Cellier, «Baudelaire et George Sand» dans *Revue d'Histoire littéraire de la France*, 1967, LX VII, pp. 239-259.)
- 9) Pierre Salomon, *George Sand*, Hatier, 1953. p. 3
 - 10) Georges Lubin, «La correspondance comme passion» dans *Magazine Littéraire, George Sand*, N° 295 janvier 1992, p. 28, (以下, *Magazine*).
 - 11) Bulletin de l'Association pour l'étude de la diffusion de l'œuvre de George Sand, *Présence de George Sand*, N°4, 1978, pp. 4-6 (以下, *Présence*).
 - 12) *Magazine*, pp. 26-28.
 - 13) «le langage commun crée une complicité» (*Présence*, p. 4.)
 - 14) Bibliothèque de la ville de Paris. 1953 年以降オーロール・サンド夫人が寄贈した «Fonds Sand» を所蔵する。
 - 15) «Gorge Sand aime s'épancher. Ce n'est pas du bavardage, mais un désir de s'exprimer.» (*Magazine*, N°295, p. 28.)
 - 16) Jean-Pierre Lacassagne, «George Sand, *Correspondance, Supplément*» dans *A.G.S.*, N°13, 1992, pp. 48-49. Lacassagne は *Histoire d'une amitié. Pierre Leroux et George Sand*, Paris, Klincksiek, 1973. の著者。
 - 17) Jean Chalon, *Chère George Sand*, Flammarion, 1991.
 - 18) J. Sand, *Rose et Blanche*, Les Amis du vieux Nérac, 1993. Nérac はフランス南西部, サンドの夫カジミールの生誕地近くの町。
 - 19) Georges Lubin, «Rose et Blanche, roman renié» dans *R.S.H.*, pp. 13-20.
 - 20) *Corr.*, tome XXV, pp. I -III.
 - 21) Debra Linowitz Wentz, *Fait et fiction : Les Formules pédagogiques des Contes d'une grand-mère de George Sand*, Nizet, 1985, p. 9.